2025 年度 福祉助成金（研究助成）完了報告書　提出用

公益財団法人 橋本財団
理事長 橋本 俊明 様

2025 年 11 月 30 日

ふりがな	かごしまけんりつたんきだいがく			
大学 研究機関名	鹿児島県立短期大学			
代表者名	役職名	准教授	氏名	飯田都
連絡先	住所	鹿児島県鹿児島市下伊敷 1-52-1		
	TEL	070-4116-1225		
	E-mail	iida@k-kentan.ac.jp		
	URL			
助成額	1,500,000 円			
研究要旨	わが国において未だ十分な研究の蓄積がない、経済的に恵まれない世帯の子どもの語彙や言葉の特徴をとらえ、どのような支援を必要としているのか、半構造化インタビューならびに質問紙調査をとおして探索的検討を行った。結果として、幼児期においてすでに語彙をはじめとした言葉の不利が確認され、同様の状態が青年期に至るまで継続しているケースが少なくないことが示唆された。また子どもを取り巻く環境には、子どもが多様な言葉に触れたり使用する機会が乏しい様子も示された。言葉の力は、学力に象徴される認知能力だけでなく、非認知能力の育成にも密接に関連しており、言葉の力を支える取り組みを含めた具体的な支援のあり方について検討した。			
研究の目的	本研究は、経済的に恵まれない世帯の子どもを対象とし、語彙や言葉の力を支えることを通し、彼らの非認知的能力の育成に寄与するための基礎的知見を築くとともに、適切で効果的な支援の方策につなげることを企図するものである。近年、教育関連場面において、非認知能力に高い関心が寄せられるようになった。IQや学力といった認知能力以上に、子どもがより良い人生を歩む上で、大きな影響力を持つことが明らかになりつつあるからである。Heckman らが示すように、非認知能力が育まれる機会を逃した子どもは、大人になった後に仕事や生活面でより多くの機会を失う可能性が高く、結果的に貧困の連鎖を生むことにつながる。諸先行研究より、非認知能力の育成には言葉の力がキーとなることが考えられ、さらには、学業上の成功に寄与するとされる「自己制御」力の育成にも働きかけることも期待され、貧困の再生産を回避するひとつの方策となることが考えられる。そこで本研究では、わが国において研究が不足している、経済的に恵まれない世帯の子どもの言葉の特徴を捉え、どのような支援を必要としているのか、基礎的な知見を得ることを目的とした。			
研究の 実施方法	経済的に恵まれない世帯の子どもの言葉の使用について、大きく以下の調査を行った。 1） 子どもたちに直接接する機会を持つ支援者の協力者としたインタビュー調査 2） 子どもの言葉の使用について問う質問紙調査			
研究の成果	インタビュー調査からは、経済的に恵まれない世帯の子どもは総じて語彙が少ないが、それはポジティブな意味を持つ語についてであり、ネガティブで攻撃的な語彙は多く有していることが指摘された。また他者とのコミュニケーションに使うものとは性質を異にする思考のための内言や、そこに至る発達過程においてみられるとされている独り言はほぼ存在しない。日常生活の言葉のみならず、学習言語においても十分でなく、さらには子どもの親にも同様の言語的特徴がみられることが示された。 質問紙調査からは、経済的に恵まれない世帯の子どもにおいて未獲得の多い語、産出語彙として使用されることが多い(少ない)語、聞いて意味はわかるが使用されることが少ない語(受容語彙)を具体的に抽出した。この結果より考えられる原因は以下の諸点である。			

	・伝えたい相手の存在があり，共感を求めるような言い回し(～よ，～ね)を使う環境にない ・他者の様子を見て気持ちを推察する機会やスキルに乏しい ・気持ちが満たされている状態や、自身にとって価値・意味があることや好きなものに触れる経験，機会に乏しい ・過去の経験を振り返るという行為が(少)ない ・語彙が分化せず，心地よくないことはすべて「うざい」で排斥し，自身を守ろうとする
研究の成果の公表状況 今後の公表予定について	日本カウンセリング学会第 55 回大会における発表、浜松学院大学ならびに鹿児島県立短期大学の研究紀要論文として研究成果の一部をすでに公表している。 現在いくつかのジャーナルに投稿中であり、来年度も引き続き学会発表を行っていく予定である。